

# 螺旋

RASEN EPIGRAPH

エピグラフ

少年が息を荒らげ、山を登ってくる。

岩で女が彼を迎え、どうしたのかと訊ねると、

「これ、何？ 下で見つけたんだ。カタツムリの殻かな」と言う。

女はそれを節くれだった指で受け取り、かぎす。

日が透けた。

「これはたぶん、貝殻。貝」

「貝って」

「貝は、海のもの」

その途端、隣で寝そべっていた黒犬がむくつと頭を上げ、

少年は分かりやすいほどにおびえ、顔に手をやらんばかりだ。

「海のもがどうして山にあるの？ 海と山はまざらないんじゃないの」

「まざるとかまざらないじゃなくて、ぶつかるの。」

わたしたちは海の人と会えば、衝突するようになっていくからね」

海にあるはずの貝がどうして山にあったのか。

昔、海の間がこのあたりに来た印なのか、

もしくは海に行った何者が持ち帰ったのか。

確かなのは、そこで大なり小なりの争いが起きたことだ。

山の者と海の者の対立は、太古から未来まで繰り返され、

その衝突のひとつひとつに物語がある。

「仲良くやればいいのに」

少年が言った時、海の集落でも、

海の子供が海の大人に同じことを口にしていて、

仲良くやればいいのに。

「会ったらいけないんだ」

どちらの大人もそう答えるほかない。